

遺烈光篇籍

當其未遇時

憂在填溝壑

英雄有屯邗

由来自古昔

何世無奇才

遺之在草澤

口語訳

主父偃は仕官はしていたが、栄達する事ができず、身内のものさえも彼を侮っていた。朱買臣は、まき拾いを仕事として生活に苦しみ、妻さえも、家にいることに耐えられないで去って行った。陳平は財産とてもまったくなく、故郷に帰ってきたが、隠れるように郊外に身を置いていた。司馬相如は、成都に帰って暮らしていたとき、家のなかには、がらんとして壁が四方に突っ立っているだけの、わび住まいであった。しかし、この四人の賢者こそ、ど偉い人物ではなからうか。残された業績は、今でも書物の上に輝いている。ただ英明の君主のみ代に巡り会わなかったときには、路傍のみぞをかばねでふさぐ心配があったのだ。英雄といえども、時に困り苦しむことはあるものだ。そのようなことは、今に始まるのではなく、大昔から引き続いてあったのだ。どんな時代にも、ずば抜けた才能の人がいないことはない。ただ打ち捨てて登用せず、草深い沢地にほかしているに過ぎないのだ。

(全釈漢文大系『文選(詩騷篇)』(三三) 花房英樹著)